

Kanazawa-Haku News Letter

金沢箔技術振興研究所
ニュースレター No.8

2013.4.1



箔打ちの用語によせて

金沢学院大学
美術文化学部教授 図書館長
山崎 達文

いきなりですけど質問です。次の字は何と読むでしょうか。

木賊・収辞・帛光・虎筋鉛・鏢……。さっさと正解をお教えすれば、トクサ・トコロイヤ・トゲル・トラフウ・トケル……。実は、幸いなことにルビが振ってありました。さもなければわかるのは木賊くらい、あとはほとんどもうお手あげ。これらは、江戸末期に金沢の箔業基盤を築いた中心人物、越野佐太郎が明治9年に整理した、半紙半折5丁紙縫綴りの『箔業用字便覧』中に採録されている箔用語の一部です。

この『便覧』は、399の用字をイロハ順にただ列記するばかりながら、箔打ちの技に関して記録された唯一の史料としていいでしょう。金沢と言うより、日本の箔業史をひもとく時に避けては通れない、越野家文書として知られる大量の史料群に埋もれて誰にも関心を持たれずにいた小帳冊です。ちゃんと勉強してからいづれ報告せねばと思いつつ、未だ怠慢のただ中にあることは大いに恥ずかしい。

明治10年の第1回内国勲業博覧会開催に先立ち、当時、農商務省は悉皆的に各地のあらゆる産業産品に関する基礎情報の収集を図っていたらしい。このささやかな筆録は、たぶん行政庁からのそんな要請に呼応するかたちで纏められた際の、手元控なのではないかと推測しています。

用語の出典からはなしを元にもどして、“木賊”はわかります。天然のサンドペーパー。ただ、製箔工程でトクサが利用されていたのは知りませんでした。今も利用する方はおいでなのでしょうか。紙仕込み前の下地紙の養生や革盤の清掃、あるいは箔箸の手入れなんかには優しく使ったのでは、などと仮定してみます。因みに、別項に椋葉(ムクノハ)とも見え、これは木賊よりもっと繊細な研磨材で、今も木工などでデリケートな表面仕上げに使いますから、ある程度用途の想像は付きます。

“収辞”(トコロイヤ)というのは、さて。何かの収まりが悪い状況を指すのでしょうかけれど不明。辞の表意的意味はあまり無いような気がするけれど、どうなのか。打ち前工程でのことのように、なんとはなしに思ったりするばかり。

つぎは“帛光”(トゲル)。帛は紙のことだから、紙が光っている状態。これは良くわかる。納得のいく紙仕込みが金をよく延ばしそうな、つやつやで頼もしい光沢を放っている、そんな感じではないでしょうか。でも、これに類した箔打紙の状態

を示す用語は、箔打ち師さんから聴かないな。

“虎筋鉛”(トラフウ)は、ズバリ、あっちゃん!の金箔がよろしくない状態を語っているでしょう。開いたら、紙の間で金箔が虎のまだら筋みたいに割れてしまっていることの謂いではないか、と。今は、この見たくない状況をどう言っているか、特定のコトバがあったかな、失念しました。

さいごに“鏢”(トケル)。この字は、一般的には同義の鏝(こじり)を当てる刀剣用語で、刀の鞘の先端に付ける金属部品のことを言います。でもここでの鏢は外装ではなく刀身の先端、きつさを指しているはず。その、底光りするように冷朧と曇りのない艶やかな表情には、うまく打ちあがった金箔の様相に似たものがある。そんな感覚にことよせてこの字が援用されていたのではないかと考えています。

よくトケている云々とは、澄でも箔でも工程の議論中にしばしば耳にしてきました。しかし、当初は一体何を言っているのかさっぱりわからず、溶ける?などと想いながら輪の外に居るしかありませんでした。どうしたって合理的説明も数値化もできかねるけれど、専門家たちだけには見えている、体感から来る手技の奥にある一番大切な製箔のツボであるらしい。

この言葉が交わされる毎に、自分がいかに門外漢の素人であるかを思い知らされたことでした。あたり前ながら、この会話に加われない者に、金箔づくりのなんぞやなどと知った風なことは決して言えるはずもないのです。

だから、史料のなかに“鏢”を見つけた時はとても嬉しかった。へへっ、昔はこの字を充ててたんですヨなんて、皆さんの話題にこれで入り込めるんじゃないかって。ごめんなさい、どこまでもペダンチックで不遜なんですけどもね。

山崎達文(やまざき たつふみ) 略 歴

1951年 東京生まれ
1979年 東京での勤めを辞めて金沢美術工芸大学入学
1985年 同大学大学院(漆芸専攻)修了
以後、出版社、金沢卯辰山工芸工房、金沢美術工芸大学等に勤務
2000年 金沢学院大学美術文化学部
工芸史、文化財、博物館学等を担当

『金沢金箔伝統技術調査報告-縁付金箔』金沢市 2010
『金沢金箔伝統技術調査報告-製箔用手漉き紙』金沢市 2011
『日本の金箔製造における澄打紙の研究』金沢学院大学紀要 10号 2012

Topics.1 『金と金箔について知る物理学ゼミナール』-レポート

当研究所は、「金沢箔普及振興スタッフ」を対象に、『金と金箔について知る物理学ゼミナール』と題して、金および金箔の物性について学ぶゼミを、平成25年1月から4回にわたり開講した。講師には、金沢大学理工研究域機械工学系教員の大角富康先生をお願いした。講義内容は、1.物質の構造、2.結晶の構造、3.外力と変形、4.物質の電気的性質、5.物質の熱的性質、6.物質の光学的性質、7.金箔の光学的性質、8.物質と放射線、である。金箔が延びるメカニズムや、金箔を光に透かして見ると青く見える理由など、難解であったが、金箔の本質を知るうえで有益な講義であった。受講者からは、「金は延びやすいが、白金や銀はどうして延びにくいのか？」など、箔業に携わっているものでしか実感できないような質問が出され、真剣かつ活発な討論がなされた。



Topics.2 断切箔の技術向上研修会

会場：金沢職人大学校 新研修室

開催日：平成25年2月24日

金沢箔作業場がある金沢職人大学校の研修室において、箔職人の技術向上研修会が行われた。これは職人が互いの技術を向上させることを目的として実施しており、今回は、断切(たちきり)金箔の職人を対象に箔うつしに欠かすことの出来ない竹箬の修理と制作をテーマに実施され、約30人の職人が参加した。断ち切り生産部会では、この技術研修会を通し、職人各々が自分の道具を自ら修理・制作する技術を身につけることで金沢の金箔の高い品質がこれからも維持され、今後、更に向上していくことを期待している。



アドバイザー紹介



金沢箔技術振興研究所は、研究所の事業内容および研究内容等について、アドバイザーに助言をお願いしています。本号では、文化財保存科学を専門とする、増澤文武氏を紹介します。

学歴・学位： 増澤文武【金沢大学大学院自然科学研究科 博士課程修了 博士(学術)】

職歴： (財)元興寺文化財研究所 名誉研究員
NPO文化財保存支援機構理事

研究論文

- 1)鉄器の保存処理の研究(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)、元興寺仏教民俗資料研究所保存科学研究室紀要 [2] (1973)、[3] (1974)、[4] (1975)
- 2)X線透過試験『埼玉稲荷山古墳出土辛亥銘鉄剣修理報告書』(1982) 埼玉県教育委員会
- 3)総説:出土鉄製品の腐食と保存処理、材料Vol.28[310](1979)
- 4)二股の出土木製品『修羅』のPEG含浸処理における寸法変化のクラスター分析 文化財保存修復学会誌 [51] (2006)

メッセージ

30年余、錆びない金ではなく、錆びた、錆と化した青銅器や鉄器の保存修復をして来ました。その中には金銅装(金銅張)大刀や冑(かぶと)、飾り金具が、また銀装の遺物も含まれ、その保存修復もしてきました。微力ですが、その経験を生かしお役に立てればと思います。

今は昔 —金沢箔職人史点描—

法政大学名誉教授 安江 孝司

金沢市内城北を貫流する浅野川中流域、大橋、小橋、昌栄橋を渡った右岸地区一帯は、いまでは余程様変わりしているものの、かつては「製箔のみでなく、ほとんどあらゆる手工業を残存せしめて・・・金沢城下町手工業の縮図を示す職人過密の」街で、そこに金沢箔業は発展をみる。

箔は材料工芸品で、しかも一般的には奢侈品に近く、市場もごく限られる小規模な産業で、「スモール・イズ・ビューティフル(小は美なり)」といえは聞こえはいいが、社会の平和・安定、経済の好・不況に大きく左右される。それで、俗に「箔屋の黄金時代と急転する残酷物語」と呼ばれる事態が繰り返され、巷間「嫁に行くなら箔屋に行きな、金の指輪が山ほど出来る」と唄われるかと思えば、逆に一転、生活に窮し、転廃に追い込まれるものも続出した。そんな歴史をもつ。



が、その故に、もうひとつ忘れてはならないことがある。それは「く箔打ち」の職人が、工芸品の職人も、作家先生とも異なる道を歩み、古くは「安政の騒動」、大正の「米騒動」、そして「最初のメーデー」と、近代の金沢でくりひろげられた社会運動の主役は「箔打ち」の職人たちも多かった」ということで、その行動は、ときに「反社会的」だと見られることもあった。そのことについては、戦前、翼賛思想によって「箔修養団」なるものが結成され、箔職人たちの「教導と更生」に体制側が務めつづけたという事実が逆証し、雄弁に物語る。



しかしながら、この箔職人たちにおける親方(問屋資本)との関係および意識の表象についてみると、それは、戦前期はいうまでもなく、戦後も1950年代末辺りまでは勝れて「前近代的」なありようを示して、「親方に対する恭順なる子方たることに徹していた」というのが、大旨、箔職人たちの実態であった。

例えば、もう物故されるも、技量に優れ、伝統工芸士に認定されたある古老箔職人から、1980年代初頭に筆者が聴き取りした回想録によれば、「昔はね、親方のいうがままに仕事をしてたもんやがね。工賃? それはくれるがまま。多いときも少ないときもあったがいね。時節もんやもんね。こっちが足りないときはくすしたのむ」というと、くほんなら貸しとくがいねとか、親方のほうも、どうにもならんときはしようもないんやけど、まあ、御飯が食えれば、それでよかったわけだね。工賃がなんでそんな計算になるのか知らなかったがいね、昔はね」といったあんばいで、両者の関係自体は「どんぶり勘定のもとに丸くいつていた」といわれる。また、冬場、降雪がひどいときなど、真先に親方の家の雪降ろしにかけつける。

それも当たり前のこととされていた。

こうした箔工たちの親方(問屋資本)に対する素朴な情動関係と意識も、1960年代初頭から中葉以降になると、戦後わが国社会の近代化の進展と歩調をあわせるかのごとくに崩れ出し、金沢箔職人は、次第に自己が親方問屋との経済的・社会的対立者であることを自覚していくことにもなる。それは、社会科学的にいえば、資本(親方問屋)に従属する一方であった「前近代的な職人存在から近代的な労使関係主体へ」と金沢箔職人層も変貌したことを物語る動向である。

金沢箔職人は、基本的には今も、問屋からの前借り支給で原料を受け取り、それを箔にして問屋に納め、その加工賃で生きる零細な家内工業者である。また、箔業界の構造が、問屋層の「商部」と職人層の「工部」に分かたれる一方、「自製自販」業者と称されるある意味「独立自営の箔職人」と「澄屋あるいは上澄業者」と呼ばれる澄職人が「工部を構成しない」という現実から、非常に複雑な労使社会関係と意識の動向が一一景気が良くて市場が上げれば多少とも労使協調的になり、市場冷えで景気が悪くなれば労使対抗的になるという周流で一一今以て見受けられるところであるが、わが故郷金沢の、「特産中の特産」の、箔業と生産者たる職人さんたちの、大いなる飛翔(発展と繁栄)をねがっておきたい。



安江孝司(やすえ たかし) 略歴

1941年 金沢市に生まれる
1965年 法政大学卒業
1971年 同大学大学院社会科学研究所社会学専攻博士課程満期退学
1971年 同大学教員
現在 同大学沖縄文化研究所客員研究員
<論文>
「伝統の町と職人の(復活構想)—金沢でみられる論議をととして」、季刊「地域」第4号、大明堂、1980)他

エクステリアへの箔塗装

前回、塗料・接着剤はすべて有機物質で、しかも硬化が進んだ後には徐々に太陽光紫外線の影響を受け、形を失ってゆくと述べました。この記事をご覧になった何人かの方から『それならば紫外線をシャットアウトする膜を作れば解決するのでは』との指摘を頂きました。おそらくUVカットフリヤー（紫外線遮断透明液）のことを云っておられるのでしょうか。私も同じ事を考え、以前「フッ素系」のUVフリヤーを使用したことがあります。大失敗でした。この塗料の欠点は金箔面に密着せず独自に動き、あるいはまったく動かないか、施行したとしても1年程度経過するとまるで美容フェイスパックのような形で全体が剥がれ落ちてしまうのです。一番の問題点は金属素地の伸縮によって引き起こされる剥離です。これを乗り越えなければエクステリアの箔押しは無理だといえます。

では、屋外金箔塗装の多い外国ではどの様に施行されているのでしょうか。わたしは以前から各国の情報誌や観光案内などで数多くの金箔による建築物やモニュメントを見て、一種の憧れを抱いておりました。「是非実物を見てみたい」と候補にあがった国は、イギリス・フィンランド・フランス・ドイツ・イタリア・ミャンマー・ロシア・イス・タイ・トルコの主要都市にしばりました。日本での本業もありますので仕事の合間をぬって出掛け、約7年を要しました。

まず、ヨーロッパの箔押しオブジェを見てみようと思われ、現地のホテル従業員からの情報を入れながら地図を片手に街歩きしました。中でも一番歩いたのはパリでした。パリはモンマルトルの丘に遮られなければ市内はほぼ平地であるため、エッフェル塔を目印にすれば方向を見失うことはありません。しかし、交差点は多岐で放射線状に道路が続いているため地図から判断し、予想しながら歩きます。そうした交差点の一角で思いもよらぬモニュメントに出会いまし、共同広場には必ずといっていいほどオブジェがあります。

オペラ座そのものも立派な金箔装飾ではありますが、街中の噴水にも美しく金箔が使われ、バステュー広場の高い塔の上にはやはり金の像が立っております。セーヌ川にかかる橋の中にはアレクサンドル三世橋があり、橋詰の四ヶ所の石組台の上には見事なベガス像が輝き、その欄干に添ってオリーブの樹に戯れる天使たちがいる…半日、橋を行き来して眺めてしまうほど、金箔屋であるわたしにとって至福の時でありました。

モスクワの赤の広場から見るロシア正教会の屋根はまるでおとぎの国のようであります。ドレスデンのキリスト教聖堂の外壁は空塵で汚れ、黒ずんではいるものの金箔部分だけは不変の輝きを失わず黄金の力を見せておりました。今はエクステリア箔塗装見聞の旅ではありますが、インテリアも見てみることにしました。エルミタージュ美術館、ルーブル美術館、ベルサイユ宮殿や幾つかの教会内部、主として祭壇部を見ました。運よく修理中の教会があると聞き、現場を見ることが出来ました。この事は後で述べようと思っておりますが驚いたことに外部箔押しと同じやり方をしていたのです。その方法であれば日本の箔押しの方が速くて綺麗で安価に出来るのではないかと思います。おそらく他の美術館・宮殿・オペラ劇場の内部も同じ技法で仕上げているに違いありません。

さて、その西洋式箔押しをご紹介します。素地（木・金属・石など）に水で溶いた特殊な粘土を刷毛で塗ります、一見すると壁塗りのようなものです。完全に乾燥させた後は刷毛ムラや凹凸を無くし表面を平滑にするために芦の葉（ススキの葉）で磨き、研磨粉や埃を綺麗に拭き取ります。そこへ薄いニカワ液（ほぼ水とっていい）を刷毛で塗ります。乾いた表面を湿らせて粘度を得ているようですが、すぐに浸透や乾燥するため全体には塗らず約15cmの範囲で塗っていきます。乾燥しない間に箔付けをしなければならぬからです。少し幅広の刷毛に静電気を起こさせ、切紙の間に入っ

た箔を所定のポイントに運び、そして押さえます。その部分の箔付けが終わると隣へ移り、また約15cmの範囲に液を塗る～押さえるという作業を繰り返し行います。すべての箔付けが完了し、2、3日もすると表面は完全に乾きます。

箔押しの際の用具はこの刷毛と払い屑を収納する簡単な箱のみですが、ここで日本では考えられない道具「極限にまで研磨されたメノウ石」が登場します。ビー玉を想像していただければ分かりやすいかと思えます。このメノウ石の表面を使い、仮置きされた金箔をかなり強く擦るのですが、擦ると云うよりも粘土の中に押し込んでいます。この粘土の特徴は素地との密着が強く、しかも寒暖の差、すなわち膨張・収縮に対応出来る特殊な粘土で、現地人の言葉で「アルメニア粘土」と聞こえました。そんなに高価なものではないはずですが日本では需要がないらしく手に入れるのは困難なようです。下地を平滑にするために使用していた芦の葉は国内で売られている多様なサンドペーパーで十分に対応できます。箔付け液として使用していたニカワ液は有機材ではありますが極微量なので特に問題はありません。

このように完成されたものは無機物質で、同質のものが一体化しているので外圧によるスレも起きず、紫外線防止のフリヤーも必要ないのです。仕上がり全体を見ると一枚一枚箔付けをしたにもかかわらず、まるで金無垢に見えるところが不思議といえましょう。

欧州のどの国も施行方法は同じです。では東洋はどうでしょうか。イスタンブールのモスクに使われている金箔はガラスに閉じ込められたブロック状になっており、バンコクのエメラルド寺院や、その他の宮殿群・暁の寺の装飾も同じガラスのモザイクになっています。ミャンマーのパゴダは漆を使用してはいますが、日本の漆とは根本的に違い、むしろゴムに近いといえます。どちらも樹液で有機材ではありますが日本の漆のように硬化しても石のようにはなりません。従って、紫外線を受けてもヒビ割れすることなく素地の膨張・伸縮にもフレキシブルに対応できているのです。

(石川県箔商工業協同組合 顧問 恩地博文)



交通案内 ※当館には駐車スペースがございませんので公共交通機関をご利用ください。

- ・路線バス — 金沢駅から北陸鉄道バス/JRバスで「橋場町」下車徒歩5分
- ・城下町金沢周遊バス — 金沢駅東口のりば乗車「橋場町」下車徒歩5分
- ・金沢ふらっとバス(此花ルート) — 金沢駅東口のりば乗車「彦三緑地」下車徒歩8分

金沢箔技術振興研究所 ニュースレター No.8

〒920-0831 金沢市東山1丁目3番10号 金沢市立安江金箔工芸館3階
 TEL:076-225-8941 FAX:076-225-8942
 営業時間/9:00~17:45 休業日/毎週土・日曜日、祝日および年末年始
<http://www.kanazawahaku-giken.jp> Email:kanazawa-haku@wind.ocn.ne.jp